

平成 21 年 5 月 20 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18500619

研究課題名（和文） 保育活動における幼児の摂食行為の発達と保育指導に関する研究

研究課題名（英文） The study on developmental transition of child's feeding action and its support in Japanese nursery daycare.

研究代表者

石黒 広昭 (ISHIGURO HIROAKI)

立教大学・文学部・教授

研究者番号：00232281

研究成果の概要：

本研究は保育園の給食場面の長期縦断観察による子どもの行動変化の記述的研究である。3歳以降の子どもにとって重要な課題は、摂食それ自体ではなく、仲間と「楽しく食べる」談話活動への参加である。従来、幼児の給食は栄養補給の場としての役割が強調されてきたため、共食時の談笑には必ずしもよい評価が与えられてこなかった。しかし、社会性やコミュニケーション能力の発達に対して共食場面は極めて重要な学習の場であることが示唆された。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,600,000	0	1,600,000
2007年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,600,000	600,000	4,200,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：生活科学・食生活学

キーワード：食行為 / 保育者 / 保育 / フィールドリサーチ / 発達 / 介助 / 談話 / 摂食

1. 研究開始当初の背景

(1) 就学前全期間調査の実施

本研究は2004年度～2005年度基盤研究C「保育活動における乳幼児の摂食行為の発達に関する研究」（研究代表：石黒広昭）の継続発展研究である。その成果は以下に報告されている。

Ishiguro, H. 2005.9 Socio-historical approach applied to interactions between a feeding infant and nursery teachers in a day care nursery, The proceedings of the

first ISCAR congress, Sevilla, Spain, 138-139.

石黒広昭 2005.7 乳幼児の「食べる」の成立：社会歴史的アプローチからみた保育と育ち 日本赤ちゃん学会第五回学術集会 学会主催講演・招待講演者（北海道大学・工学部）

石黒広昭 2005.6 保育園における15ヶ月児の介助を伴う食行為の研究 北海道大学大学院教育学研究科紀要 第96号 69-91.

前調査では0歳から2歳まで同一集団の子どもを継続的に観察してきたが、本研究では、

さらに保育園修了までその子らに継続調査することを意図して計画された。二つの研究を通して、同一児が0歳から6歳まで継続的に調査されることになった。本研究の遂行により、保育園の給食場面において同一の子ども達を就学前の全期間で記録、分析することが可能になり、保育活動における食行為の発達を検討する上で非常に重要なデータが収集されることが期待された。

(2) 調査フィールドの協力体制

調査フィールドは調査者が継続的にかかわっている保育園であり、園長以下保育士、栄養士まで十分な協力を得られる状況であった。また、2歳まで調査していた子らの親からはその後の継続調査について協力承諾をもらっており、調査を継続する上で支障がない状況になっていた。

2. 研究の目的

本研究では幼児（3～5歳）の摂食行為の発達的变化を給食指導との関わりにおいて捉えようとする。その焦点となるのは、保育園における集団給食場面である。本研究では三つの調査目的を立てている。第一、第二の目的は申請者の先行研究と連続するものであり、第三の目的は本研究独自のもので、特に重視される。

人間の発達は他者の「支援」なしにはありえない。本研究では個体の発達は社会的資源との接触の中で成立するものと考えており、発達支援とはそのような社会的資源の整備を指す。子どもに対して親や保育者は意図的に、そして無意図的に様々な環境を準備している。本研究では、保育活動において、人の基本的な行為の一つである摂食行為を取り上げ、それを支える社会的資源＝環境の分析を行う。幼児期の子どもの摂食行為がどんな社会的資源に支えられ、どのような様式で、どのような経過を経て発達するものであるのか明らかにすることが本研究の第一の目的である。

本研究のフィールドは保育園である。保育園は家庭とは異なる。一人の保育士が同時に複数の子どもの摂食介助を行っている。このような状況は通常一人以上の大人が一人の子どもの摂食介助をする家庭での食事とは異なる環境を作り出す。例えば、保育施設の子供達達は、単に「食べる」ための運動技能や道具操作だけでなく、保育者との共同や集団での食事という、保育状況に応じた社会的知識と技能をも獲得しなければならない。保育施設が作り出す社会的資源に特徴的な摂食行為とその発達支援とはどのようなものであろうか。この点を明らかにするのが本研究の第二の目的である。

以上の二つの目的は、乳児期の子どもにお

いても共通して検討されるべきことであるが、3歳未満の子どもと3歳以上の子どもでは発達的に大きな違いがあると実践的に理解されている。そのことは、通常保育現場では2歳児クラスまでの子ども達を「未満児」としてそれ以降の子どもと実践的に異なるカテゴリーとして扱っていることからわかる。給食場面において、そのことは他者との関わりにおいて見られることが予想される。2歳までの子どもにとって給食時の中心的な課題は「食べる」ことであり、保育者の介助もそこに中心的に向けられる。しかし、3歳以降では子ども達はある程度自分で食べることができるために、「食べさせるための介助」は減り、むしろ他児とおしゃべりをして食べないことに対する「食事の促し」が中心となるだろう。

要約すれば、3歳から5歳では給食は栄養摂取の場よりも社交の場としての意味を強くするだろう。こうした中で「他者と楽しく食べる」ことが保育者とともに目指される。食を共にしながら他者と楽しい時間を過ごすことは子ども達にとって自我や他者関係を形成する上でとても重要であると考えられ、就学後の給食においてもその意義は変わらないであろう。本研究ではこうした3歳クラス以降の子ども達の給食時における仲間や保育者との社会的交流、保育者の指導という三要因を相互に関係づけ、その特徴を明らかにすることを目指す。これが本研究の第三の目的である。

3. 研究の方法

(1) 保育園における乳幼児の食事調査とその分析の年次計画

前科研調査で蓄積されたデータの分析と並行し、新しいデータの収集を行う。具体的には、H18年度には、調査を4歳児に対して行い、分析は本申請研究前年度に特別な助成を受けずに行われた3歳児に対して行われた。以後、H19年度は調査が5歳児に対して行われ、データ分析は4歳児に行われた。H20年度はデータ分析が5歳児に対して行われ、0から5歳までに関して補助調査が行われた。

(2) 調査

① フィールド調査

調査者が前調査からかかわる大都市圏にある私立保育園で調査を行った。同園は、給食に独特のメニュー管理を行っている園である。また、これまで申請者が前任校以来、保育活動について長く共同実践研究を行ってきた所でもある。そのため、申請者は

その保育実践のあり方に関して園の管理者や保育士、栄養士と常日頃意見交換する関係にある。

②調査手続き

調査者は保育開始時点から保育室に入り、摂食行動を中心に一日の保育実践を観察し、記録としてフィールドノーツを作成する。同時に、食事場면을デジタルビデオカメラ、ICレコーダーで記録する。摂食行動以外の時間にも観察を行うのは、子ども達との関係構築のためと、食事発達を子ども達の社会性や他の精神機能発達に対して相対化することができるようなデータを得るためである。これもフィールドノーツに記録される。

③収集されたデータの整理と蓄積

フィールドノーツは調査回別にまとめ、電子ファイルとしてハードディスクに入れ、データベース化する。ビデオテープ記録はテープ別に記録内容を表示したラベルをつけ、DVDに保存する。

(3) 1.2 3歳児の既存調査の分析

①分析の手法

分析方法は石黒(「AV 機器を持ってフィールドへ」新曜社 2001)に基づく。まず、フィールドノーツに基づいて、保育実践活動の基本スクリプトを取り出し、保育実践の構造全体を確定する。その後、それぞれの観察日における食事場면을保育活動全体から抜き出し、その基本構造を取り出す。この基本構造を全観察回を通して整理し、時系列的にその変化が見られるように図式化する。これに基づいて、保育者による介助行為、子どもの摂食行動に大きな変化が見られた観察回を取り出す。その観察回のビデオ記録の食事場面を取り出し、DVD等に電子映像ファイルとして入れ、データベース化する。その中から、さらにポイントとなる行為場面を取り出し、その部分の保育者と子どものやりとりを集中的に分析する。その際、ビデオ記録のフレーム単位の分析を行うためにデジタルデータをパソコンに取り込み、編集ソフトで整理していく。そのビデオ記録に対して、詳細なトランスクリプト(行動と発言の文字記録)を作成し、検討する。動画に対応したソフトの作業容量は大きいと、記録をまとめるために使用するビデオ編集・分析用のパーソナルコンピュータとソフトを一式用意する。このフィールドノーツの整理、ビデオ編集と焦点場面のトランスクリプト作成のために研究補助謝金を使用する。

4. 研究成果

(1) 3歳児クラス

クラス編成や新園舎の利用といった大きな環境変化を除くと、年齢が低い頃には椅子やテーブル、食具、食べ物など、その物理的環境に大きな変化が見られたが、後半になるとむしろソフト面として保育指導内容が複雑になり、言語・表象環境の変化が見られた。特に、三歳以降の時期に特徴的なのは、子どもたちがただ「食べているだけではない」ことである。何よりも特徴的なのは、その談話のあり方である。食事は食具を使って食べ物を処理していく道具的活動(instrumental work)(Shultz et al., 1982)である。しかし、この頃の語りはその「食べる」という活動に動機付けられたものだけではなく、それとは全く無関係な内容についてもなされる。その会話の連続性は「今ここ」の状況(配膳された食べ物など)だけでなく、言語によって照会される「そこにはない」共通の話題によって保たれる(Erickson, 1990)。これは大人の食事場面における談話の一般的特徴であろう。

(2) 4歳児クラス

保育園における4歳児クラスの食事場面に特徴的であったのは、食事場面が「食べる場」である以上に「コミュニケーションの場」になっていることであった。つまり、食べるという行為と「話す・聞く」という行為の二つが同時に行われるという、対物的、対人的に複雑な相互行為に子どもたちは関与していた。特に興味深いのは子どもたちが眼前の食べ物や人について言及する以上に、眼前にない対象について語り合うことである。では、どのようにそうした会話は可能になるのだろうか。今回の分析から示唆されたことは子どもたちが共通に持っている文化的資源の利用である。特にテレビ等に出てくるキャラクターなどがその主要な資源になっていた。ただし、子どもたちの会話は他者の発言の意味を直接引き継ぐものではなく、同一の項目が出たら、それに自分の持っている知識をただ連結するというものであった。同一項目が連続することにより、一見談話内容の一貫性が維持されているように知覚される会話が実現されるのである。こうしたいわば言語を中心とした「コミュニケーション訓練」が食事という道具的行為の場で行われていることの意味は今後さらに検討する必要がある。

(3) 5歳児クラス

3歳から5歳では給食は栄養摂取の場というよりもむしろ社交の場である。本研究ではこうした3歳クラス以降の子ども達の給食時における仲間や保育者との社会的交流の特徴を明らかにすることを目指した。その結果、以下の点が明らかになった。(1) 保育者は子ども達に対して社会的なマナーや偏食解消を含む食べ方について指導するが、子ども達と楽しく会話する存在としての役割も同時に担う。(2) 子ども達は、保育者の指導に対して、様々な形の「抵抗」を試みるが、それは多様な戦略を用いた交渉として実現され、社会的スキルの発達に寄与する。(3) 幼児は他者と話しながら食べる事が多く、従来こうしたふるまいは「ながら食べ」などといわれ、問題視されてきたものである。しかし、こうした行為も、食べるという行為に対するポジティブな態度を形成する上で重要であることがわかった。保育者もしばしばそのことを自覚した対応を行う。また、そうした食事時の会話は複雑な会話や言語使用の学習の場となっていた。年中、年長児は食事をしながら眼前にない事物や話題について複雑な会話を行う。言語学習の場として共食場面を捉え直す必要があるだろう。

なお、本研究と本研究の先行研究を通して就学前施設における0歳から6歳までの長期的な食事場面の映像資料を収集することができた。このデータベースは子どもの観察資料として貴重である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 5 件)

- ① Ishiguro, H. (refereed / paper presentation) Speech genres for disciplining young children in Japanese nursery schools. In 19th EECERA Annual Conference: Diversities in Early Childhood Education, Strasbourg (FRANCE), 26th, 27th, 28th, 29th August 2009.
- ② Ishiguro, H. (refereed / paper presentation) Speech Genres Used During Lunchtime Conversations of Young Children. In Bakhtin Conference 2009: The Second International Interdisciplinary Conference on Perspectives and Limits of Dialogism in Mikhail Bakhtin, Stockholm university, June 3-5, 2009.
- ③ Ishiguro, H. 2008.9.10 (Invited

Keynote Speaker) Zone of Proximal Development as negotiating space: Microanalysis of the activity of disciplining in child care. International congress of ISCAR. San Diego: UCSD, USA.

- ④ Ishiguro, H. 2007.8 (refereed / paper presentation) How does a three year-old child learn to participate in a lunchtime discourse about invisible contents? In 17th EECERA Annual Conference: Exploring Vygotsky's ideas: Crossing borders, 2007. Aug. 29-Sept. 1, Prague, Czech.
- ⑤ Ishiguro, H. (refereed / paper presentation) 2007.3 Developmental transition of environmental resources for child's feeding action in Japanese nursery school, The 35th annual congress of NERA (Nordic Educational Research Association), University of Turku, March 15-17, 2007

[図書] (計 2 件)

- ① 石黒広昭 編著 2008 「保育心理学の基底」 萌文書林 285.
- ② 石黒広昭 2008 「文化に対する社会歴史的発達論の視角と課題」 田島信元編 2008 文化心理学 (朝倉書店) 54-71.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石黒 広昭 (ISHIGURO HIROAKI)
立教大学・文学部・教授
研究者番号: 00232281

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし